

イギリス的な情景

— the scenes in Britain —

早稲田大学 教授
小田島 恒志

(第17回)

コーンウォール

イギリスという国がイングランド、スコットランド、ウェールズ、北アイルランドという4つの地域、というより、4つの「国」=nationから成ることはよく知られている。1年前に独立を目指して(て、結局残留となっ)たスコットランドの多くの人々が、EU離脱に関しては寧ろ反対派=残留派が圧倒的に多かったのも、イギリスの中の1地方ではなくヨーロッパの中の1国でありたいという気持ちの表れに他ならない。

スコットランド独立の機運が高まったのは何も最近に限ったことではない。28年前に行った頃にもすでに「ショーン・コネリーを大統領にしてスコットランドの独立を！」というスローガンをよく耳にした。

スコットランドやIRAの闘争で目立つ北アイルランド以外にも、虎視眈々と独立を狙っている(という噂の絶えない)地域がある。イングランド最西端(と言うか、最南西端)部コーンウォール地方である。半分冗談の噂だけかと思っていたら、2009年にはイングランドの一県から単一の自治体へと移行した。

コーンウォール地方を旅してみると、確かに、同じイングランドでもロンドン周辺とは雰囲気が違う。イギリスの地図を見ていればよくわかる。もともとブリテン島の先住民族ケルト人が、アングル人、サクソン人、デーン人、ノルマン人らの

侵攻によってどんどんイングランド南東部の中心から押し出されていった先が、北はスコットランド、北西はウェールズ及びアイルランド、そして西がコーンウォール地方というわけだ。今でもケルト文化がそこかしこに感じられる。イギリス国旗だけではなく、コーンウォールの旗が掲げられているのもよく見かける。黒地に白い十字と独特である。黒い炭の中に見つかったスズの白さをイメージしたものらしい。

このスズの採掘場跡地を見に行ったことがある。炭鉱や銅山同様、長い時間「穴」の中で作業し、落盤などで閉じ込められることもあったという。そんな時は、獣脂でできた蠟燭を食べて飢えを凌いだという話がリアルだった。

最西端Land's Endから1~2マイルほど手前の海岸沿いに、「ミナック・シアター」(Minack Theatre)という野外劇場がある。1932年、ロウイーナ・ケイドという女性が、シェイクスピアの『テンペスト』を上演するのに最適の場所だと自宅の庭を提供し、その後、庭師と二人だけで石を積んで劇場の形に造り上げたという。毎年、夏には実際の芝居が上演され観光客で賑わうのだが、冬に訪ねたために閑散としていた。おかげで、舞台の上で記念写真を撮ることができた。イギリスの舞台に立ったぞ!